

「保育内容・表現」の研究動向に関する一考察 —CiNii 掲載論文を中心に—

A Study on Research Trends of Expression in Childcare Content: Focus on Published Papers in CiNii Data Base

畑野 裕子

要旨

「保育内容・表現」に関する研究は、数多くみられるが、研究テーマの動向についての詳細な検討や客観的な分析に観点を絞った研究は、数少ない。そこで、本報では、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーター（CiNii）を用いて、「保育内容」と「表現」をキーワードとしてフリーワードに入力し、それらに関する文献を検索した。得られた論文タイトルをテキストマイニングにより分析し、主要論文をもとに、「保育内容・表現」に関する研究動向の検討を試みた。

キーワード：保育内容 表現 CiNii テキストマイニング

1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、保育者養成課程における「保育内容・表現」に関する研究動向に関して一考察を試みることである。具体的には、CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いた分析を中心に検討する。

既報（畑野，2016）において、筆者は、「保育内容・表現」に関する先行研究の動向について概観し、特徴的な研究の知見や成果と問題点等の整理・検討を試みた。なぜなら当時、平成20年に改訂された幼稚園教育要領（文部科学省，2008）および保育所保育指針（厚生労働省，2008）をもとに、教育・保育現場において、その改訂に伴った様々な取り組みがなされていたからである。さらに、平成22年2月27日には、指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について一部改正（厚生労働省，2010）の通知がなされた。当時これらの改正に伴い、保育者養成課程を有する養成校においては、カリキュラムの改編が実施されていた。そこで、「保育内容・表現」に関して検討している先行研究の動向について概観し、それらの特徴的な研究の知見や成果と問題点を整理する必要があると考えた。

その結果、「保育内容・表現」に関する先行研究においては、「身体表現」、「音楽表現」、「造形表現」等の専門分野から、単独またはオムニバス形式、あるいは各々の専門分野から総合的な表現へと展開されている実践報告が数多く認められた。特に、平成22年以降は、「総合表現」に焦点化される傾向が認められ、その重要性が示唆された。その「総合表現」の中での教育的方略としては、演劇的プログラムを取り上げた報告が特徴的であった。

また筆者は、このようなテーマに関して、同報（畑野，2016）以前においても検討を試みている。具体的には、保育者養成における保育内容「表現」とリトミックに関して研究動向と実践事例から考察を試みている（畑野・道籐，2013）。そして、その次報（畑野，2016）におい

神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 教授

て、その結果を反映させている。このような既報での取り組みを含めて、現在の CiNii 掲載論文における「保育内容・表現」と「研究動向」を論文テーマに含む研究を概観してみると、前述の既報（畑野，2016）と畑野・道籬（2013）以外には、現時点における研究史的な報告はあげられていないようである。

一方、2017年には、新たに幼稚園教育要領（文部科学省，2017）、保育所保育指針（厚生労働省，2017）や幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府，2017）の改訂や、保育・幼児教育関連の省令が告示された。これらを背景として、保育者養成課程において、保育力の基礎を培うことを目的としたカリキュラムに関して、「保育内容」の研究が数多く取り組み始められている（畑野，2019）。しかしながら、多岐にわたる「保育内容」の研究は、行政的な指針の変更などを反映して、時代によって変化すると推察されるものの、網羅的な研究動向の分析はこれまであまりなされていない。

そこで筆者は、これまでの「保育内容」に関する文献を国立情報学研究所の学術情報ナビゲータ（CiNii）から、「保育内容」をキーワードとして抽出し、論文のタイトルに対して、テキストマイニングの手法を用いて計量的なアプローチにより研究動向を分析した（畑野，2019）。論文タイトルに含まれる語句を分析した主な特徴的結果をまとめると、次のようであった。「保育内容」の5領域（「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」）では、自然を含む「環境」や、「表現」の中でも特に「音楽」に関する論文タイトルが多かった。文献の出典からみると、大学紀要では、教員養成課程の学生を対象とした授業との関わりが推察された。また、経時的にみても、変わらない研究テーマと、幼稚園教育要領などの改定に伴って変化する研究の動向もうかがえた。2008年以降には、教員養成の授業における実践的な指導に関する研究との関わりが推察された。また、2017年以降では、「保育内容」の領域の中でも「言葉」や「人間関係」に着目した研究が多くなされていることが特徴的であった。以上のように、既報（畑野，2019）において、5領域の「保育内容」の研究全般に関する網羅的な研究動向の把握については、検討することができた。しかしながら、「保育内容・表現」に関しては、既報（畑野，2016）以降に、「保育内容・表現」と「研究動向」を論文テーマに含むような研究史的な報告は、ほとんどみられない。さらに、研究雑誌や研究論文、文献等を網羅的に収集し、客観的な分析に観点を絞った研究は、ほとんどみられず、新たな研究動向の検証が必要と考える。

そこで本報告では、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーター（CiNii）から、「保育内容・表現」をキーワードとして、フリーワードに入力し、それらに関する文献検索を試みる。そして、論文のタイトルに対して、テキストマイニングの手法を用いた計量的なアプローチにより分析し、主要論文をもとに、「保育内容・表現」に関する研究の動向の検討を試みることにした。

2. 方法

2.1 対象文献の抽出

国立情報学研究所（NII）の CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）を使用し、CiNii に掲載された文献における対象文献の抽出に際し、「保育内容」と「表現」の二つのキーワードをもとに、AND 検索を行い、どのような文献を対象とするか決定するために、次のような手順を踏んだ。

すなわち、「保育内容」と「表現」のキーワードをどのような条件で入力するかについて、まずは検索条件別にその数を確認した。検索方法は、フリーワード検索（タイトルだけでなく、キーワードとしてあげられている場合も含まれる）または、タイトル検索、CiNii に論文の本文掲載か否かというものである。その結果、2020年8月21日時点で、1978年～2020年3月までに発行されたとして掲載された文献をみると、フリーワード検索（本文掲載無し）では388件、フリーワード検索（本文掲載有り）231件であった。また、タイトル検索（本文掲載無し）では275件、フリーワード検索（本文掲載有り）149件であった。これら調査対象文献の件数の結果をもとに、本報では、最多件数としてあげられているフリーワード検索（本文掲載無し）結果の388件に関して、調査対象文献とし、それらを抽出した。

国立情報学研究所（NII）のCiNiiを使用し、CiNiiに掲載された文献について、「保育内容・表現」のキーワードをもとに、フリーワードに入力して、調査対象文献を抽出した。2020年8月21日時点で、掲載された文献は、1978年～2020年3月までに発行されたものであり、388件であった。また、これらのデータベースからは、論文タイトルとともに、執筆者氏名、出典、執筆年、論文のページ数が検索可能であるため、それらについても収集した。しかしながら、これら抽出文献には、重複掲載が5件あったため、重複文献については削除した。また、この資料整理の段階で、論文名として掲載されているものの、論文の内容とは直接関係のない語句（例えば、**教授退官記念号などの語句）が付随していた場合には、直接関係のない語句を削除した。また、不必要な数字なども同様に削除・整理して、383件を抽出文献とした。

調査対象の抽出文献をもとに、出典に関して詳細にみていくと、まず、一見学会誌の名称ではあるが、調べてみると大学学科内の学会名称を有する文献が散見された。そこで、各文献について、オープンアクセスによる詳細な情報を確認した。その結果、学会の規模が全国規模ではなく、会員が学内の限られたメンバーに特定されており、会員資格がオープンな学会ではないと判断された。したがって、大学学科内の学会誌については、大学紀要として整理した。

次に、学会出版物においては、学会誌本体ではなく、一般的な学会発表要旨の学会大会号を含んでいる学会出版物も散見された。特に、特定の年度の学会大会号（例えば、日本保育学会大会研究論文集，1996，2001～2004）については、一般的な学会発表要旨を含んでいるものの、他の年度の掲載がなく年度がイレギュラーであり、個別の分量もみても2ページ以下であった。したがって、通常の学会誌（例えば、保育学研究）とは異なったので、削除することとした。削除した文献は、日本保育学会大会研究論文集が計39件、日本体育学会大会号が計2件、日本森林学会大会発表データベース1件で、合計42件であった。したがって、それ以外の論文について、整理すると341件となり、これらを「一次抽出文献」とした。

この一次抽出文献をもとに、次にあげる文献の出典に関して、調査対象文献を整理して絞り込みを行った。

- ①大学紀要：大学が発行する研究紀要及び報告書に掲載されている文献（大学学科内の学会名称を有する文献は、全国規模のオープンな学会ではないため、大学紀要に含めた）
- ②学会出版物：日本学術会議において学術研究団体として登録されている学会が発行する学会出版物に所収されている文献
- ③出版社：出版社が発行する研究雑誌などに掲載されている文献

④その他：日本女子体育連盟、関西楽理研究会

また、1978年～2020年3月までに発行され掲載された文献について、経年の変化を概括するために幼稚園教育要領の改訂時期の区切り（1977年、1989年、1998年、2008年、2017年）を参考にしつつ、先行実施・改訂間の年数を考慮したうえで、本報では便宜上次のように4つに区分（1978年～1997年、1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2020年）し、整理することとした。

2.2 分析の手続き

前述した方法で抽出した「一次抽出文献」の論文タイトルには、学会発表における番号や記号、その他にも直接論文タイトルとは関連性のない名称（文献における特集記事やシンポジウムなどの情報）を含んでいるものが多数あった。今回の分析に関係がないと思われるそれらの情報については、各論文タイトルをチェックして、不必要な情報に関して削除したうえで論文タイトルを整理し「二次抽出文献」とした。なお、分析は上記に抽出した論文タイトルに対するテキストマイニングをKH Coder 3（樋口，2014，2019）によって実施した。同時に、年代を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、年代別にみた研究動向の推移について検討した。この手法を用いた研究としては、例えば、「保育内容」に関する研究動向を分析した畑野（2019）の報告がある。これを参考に本報では、以下の手続きで分析を進めた。

（1）「保育内容・表現」に関する研究の構造の把握

抽出した文献のタイトルについて形態素解析を行い、論文タイトルに含まれている名詞句、サ変名詞句の出現頻度を把握した。そして、出現頻度上位語句の共起ネットワークを作成し、そのまとまりから研究の構造を解釈した。

（2）論文種別による研究動向の差異の検討

出現頻度上位語句の共起ネットワークに、論文種別を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、論文種別による研究動向の差異について検討した。

（3）年代別にみた研究動向の推移の検討

年代を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、年代別にみられた研究動向の推移について検討した。

3. 結果と考察

3.1 「保育内容・表現」に関する CiNii 掲載論文

3.1.1 「保育内容・表現」に関する論文の CiNii 掲載状況

方法に記したように対象文献の抽出を行い、論文名を確認して、最終的には341件の抽出文献に対して「二次抽出文献」を作成した。表1は、それら抽出文献について、文献の出典と発表年数をクロス集計し、出現度数及びパーセンテージを示したものである。文献の出典をみると、大学が発行する研究紀要が315件で、全体の82.2%と最も多く、続いて学会発行物が65件で17.0%、出版社が1件で0.3%、その他の出典が2件、0.5%である。

また発表年でみると、表1に示したように、2017年～2020年が157件で全体の41.0%を占め

表1 「保育内容・表現」に関する研究における文献の出典と発表年のクロス集計

年 代	紀 要		学 会		出 版		その他		総 計	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
1978年～1997年	13	3.4	16	4.2	0	0.0	0	0.0	29	7.6
1998年～2007年	38	9.9	29	7.6	0	0.0	0	0.0	67	17.5
2008年～2016年	125	32.6	3	0.8	0	0.0	2	0.5	130	33.9
2017年～2020年	139	36.3	17	4.4	1	0.3	0	0.0	157	41.0
総 計	315	82.2	65	17.0	1	0.3	2	0.5	383	100.0

ており、最も多く、続いて2008年～2016年の130件で33.9%、1998年～2007年の67件で17.5%、1978年～1977年の29件で7.6%となっている。したがって、年次経過に伴い論文数は増加し、2017年～2020年と2008年～2016年の13年間で、全体の約4分の3を占めていることが読み取れる。

大学が発行する研究紀要をみると、1978年～1997年が13件で3.4%、1998年～2007年には38件で9.9%、2008年～2016年が125件で32.6%、2017年～2020年の年代には139件で36.3%であった。学会が発行する出版物については、1978年～1997年が16件で4.2%、1998年～2007年には29件で7.6%、2008年～2016年が3件で0.8%、2017年～2020年の年代には17件で4.4%となっている。出版社については、2017年～2020年の年代に1件で0.3%であった。その他の出版物については、2008年～2016年に2件で0.5%であった。

以上の結果から、「保育内容」「表現」に関する文献の出典をみると、大学が発行する研究紀要は、1978年～1997年を除いて、いずれの年代においても最も多く、年次変化についても増加傾向がみられ、特に2017年～2020年の4年間が著しい。それに伴い、「保育内容」「表現」に関する研究の総計は、年次変化に伴い著しい増加傾向を示している。

3.1.2 「保育内容・表現」に関する論文タイトルの形態素解析

「保育内容・表現」に関する研究の動向を明らかにするために、論文タイトルにおいてどのような語句が選択される傾向にあるのかについて、計量的分析を試みよう、テキストマイニングによる形態素解析を行った。その結果、「保育内容・表現」に関する研究の論文タイトルからの抽出語総数は、計7,674語であった。

抽出語の中でも、まず名詞句についてみる。表2は、文献のタイトルに使用されている名詞句のうち、出現回数5以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。最も出現回数が多い抽出語は、「内容」284であり、続いて「音楽」79、「領域」47、「学生」46、「身体」40、「言葉」34、「子ども」34、「幼稚園」29、「幼児」24、「課程」23、「科目」22、「課題」20、「試み」20、「遊び」18、「教員」17、「教材」17、「中心」17、「取り組み」16、「環境」14、「方法」11、「要領」11、「絵本」10、「感性」10、「視点」10、「人間」10となっている。以下出現回数5以上の抽出語に関しては、表2の通りである。以上の結果から、保育内容表現に関する文献の論文タイトルにおいて、幼稚園教育要領などにあげられている内容に関わる活動の視点から見ると、「音楽」表現が最も多く、次に「身体」表現、そして「絵本」に関わる言語表現や造形表現と推察される。

次に、抽出語の中でも、サ変名詞句についてみる。表3は、文献のタイトルに使用され

ているサ変名詞句のうち、出現回数 5 以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。最も出現回数が多い抽出語は、「保育」384で、続いて「表現」366、「授業」108、「実践」102、「養成」86、「指導」73、「研究」70「考察」61、「教育」60、「造形」47、「活動」46、「総合」23、「検討」22、「演習」15、「着目」14、「連携」14、「活用」13、「関係」13、「展開」13、「分析」13、「意識」12、「実習」11、「調査」11、「イメージ」10となっている。以下出現回数 5 以上の抽出語に関しては、表 3 の通りである。

表 2 出現回数 5 以上の名詞抽出語（頻度順）

名 詞	頻度	名 詞	頻度	名 詞	頻度	名 詞	頻度
内容	284	教材	17	草むら	8	大学	6
音楽	79	中心	17	能力	8	題材	6
領域	47	取り組み	16	あり方	7	動き	6
学生	46	環境	14	クラス	7	ピアノ	5
身体	40	方法	11	過程	7	観点	5
言葉	34	要領	11	学び	7	関わり	5
子ども	34	絵本	10	学科	7	基礎	5
幼稚園	29	感性	10	焦点	7	教授	5
幼児	24	視点	10	素材	7	芸術	5
課程	23	人間	10	要素	7	児童	5
科目	22	カリキュラム	9	アンケート	6	主体	5
課題	20	事例	9	オペレッタ	6	専門	5
試み	20	リズム	8	現状	6	知見	5
遊び	18	意義	8	効果	6	動向	5
教員	17	言語	8	図画	6		

表 3 出現回数 5 以上のサ変名詞抽出語（頻度順）

サ変名詞	頻度	サ変名詞	頻度	サ変名詞	頻度	サ変名詞	頻度
保育	384	検討	22	関連	9	創造	6
表現	366	演習	15	構成	9	評価	6
授業	108	着目	14	アプローチ	8	描画	6
実践	102	連携	14	育成	8	変遷	6
養成	86	活用	13	改善	8	理解	6
指導	73	関係	13	ダンス	7	依拠	5
研究	70	展開	13	改訂	7	運動	5
考察	61	分析	13	学習	7	歌唱	5
教育	60	意識	12	制作	7	開発	5
造形	47	実習	11	創作	7	記録	5
活動	46	調査	11	報告	7	工夫	5
総合	23	イメージ	10	工作	6		

3.1.3 「保育内容・表現」に関する研究の構造

抽出語間の関連性を探求するために、表 2・表 3 に示した出現回数 5 以上の抽出語を利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果については、図 1 に示し、各抽出語同士の結びつきを俯瞰的にみている。

論文に選択される語句の傾向として、表2・表3の出現回数5以上の名詞句とサ変名詞と同様に、図1の抽出語間の関連である共起ネットワークにおいて、「保育」「内容」「表現」「授業」「実践」「養成」が中心となっている。そのほかに、「音楽」は「保育」「表現」に加え「指導」、「考察」は「保育」「内容」が共起している。「養成」「課程」の「研究」なども共起がみられる。また、「構成」は、「知見」「依拠」、「連携」「科目」、「教員」「着目」と共起がみられる。これらのことから、論文の「構成」は、「知見」への「依拠」、「連携」「科目」、「教員」の「着目」に関わっていると推察される。

また、個別にみられる共起関係についてみると、「幼稚園」「教育」「要領」「改訂」のまとまりに関しては、特に幼稚園教育要領の改訂が強く反映されていると推察される。「遊び」の「過程」「工夫」「理解」、「教材」の「開発」、「記録」の「分析」、「関連」「芸術」、「能力」の「育成」、「学び」の「主体」、「創作」の「観点」などは、相互の語句が共起して、一つの教育的な意味をなしている語句と読み取れる。さらに、「人間」「関係」、「リズム」「運動」、「図画」「工作」については、具体的な保育内容の活動そのものに関わるものと思われる。「身体」「草むら」「クラス」「検討」の共起がみられるが、出現回数40の「身体」の中で、特定の語句「草むら」を含む「クラス」「検討」に関する複数の文献によって、共起したと考えられる。

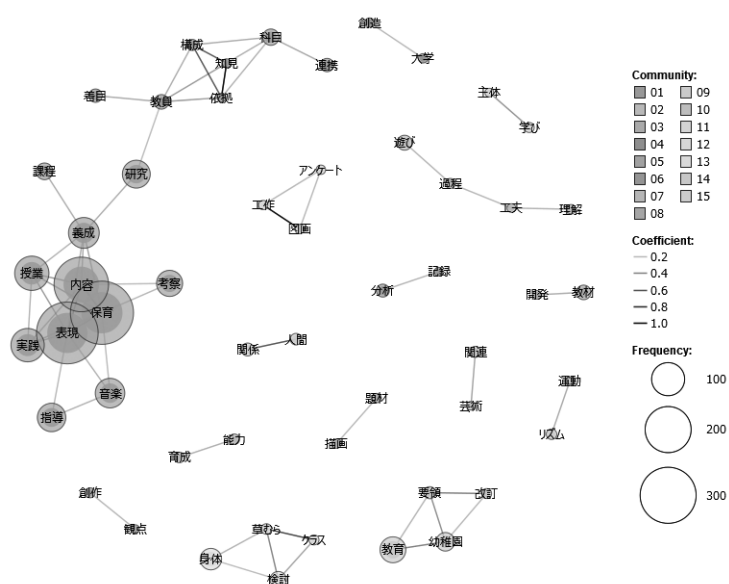


図1 「保育内容・表現」に関する論文の抽出語間の共起ネットワーク

3.1.4 「保育内容・表現」論文種別による研究動向の差異の検討

論文種別との共起関係を設定して得られた共起ネットワークを、図2に示す。図2において、紀要と学会において共通して共起がみられる語句は、「保育」「表現」「内容」「実践」「研究」「指導」「領域」「教育」「学生」「音楽」「造形」である。これらの語句から、紀要と学会における論文の特徴は、「保育」「内容」「表現」を中心に、「学生」、「指導」、「実践」、「教育」、「研究」がなされており、「領域」に関しては「音楽」「造形」が取り上げられていると推察される。

紀要においてのみ共起がみられる語句は、「養成」「言葉」「身体」「子ども」「考察」であり、

「養成」課程における「保育」「内容」の「言葉」「身体」の特徴がみられる。学会において共起がみられる語句は、「幼稚園」「描画」「言語」「教材」「開発」などを始めとして多種にわたるが、個々の数は多くはない。これらの語句から、学会における論文の特徴は、「幼稚園」での、「教材」「開発」、「描画」「言語」が取り上げられていると推察される。その他においてのみ共起がみられる語句は、「創作」「ダンス」「大学」「創造」「主体」である。これらの語句から、その他における論文の特徴は、女子体育連盟の出版物の内容に象徴されるように、「大学」などで「主体」的な「創造」として、「創作」「ダンス」が取り上げられていることが影響していると推察される。出版においてのみ共起がみられる語句は、「幼児」「児童」「環境」である。

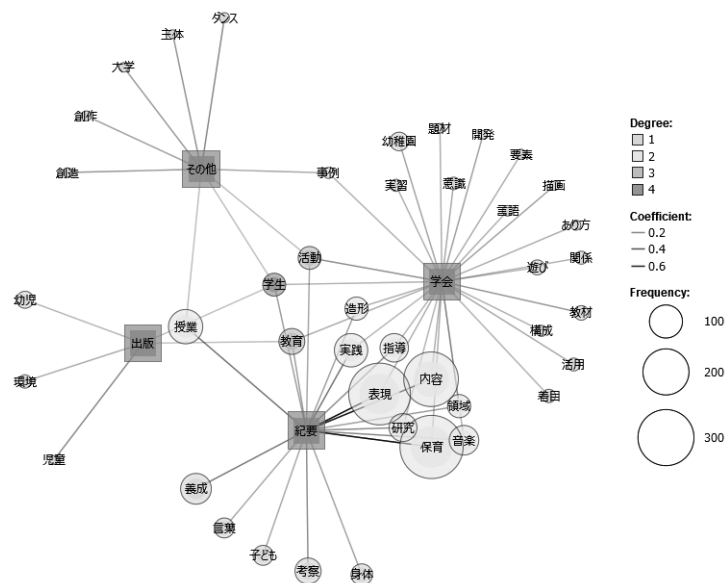


図2 「保育内容・表現」に関する論文種別による抽出語との共起ネットワーク

3.1.5 「保育内容・表現」年代別に見た研究動向の推移

「保育内容・表現」に関する年代と共起関係を設定して得られた共起ネットワークを、図3に示す。1978年～1997年、1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2020年の全ての年代に共通している語句は、「表現」「内容」「考察」であり、「表現」「内容」の「考察」を中心としていると思われる。1998年～2007年、2008年～2016年と2017年～2020年に共通している語句は、「保育」「授業」「養成」「音楽」「活動」である。2008年～2016年と2017年～2020年に共通している語句は、「造形」「学生」「研究」「指導」であり、「学生」を対象としたテーマ、「指導」に関する「研究」、「造形」を対象とした論文と推察される。また、1998年～2007年と2017年～2020年に共通している語句は、「幼稚園」「教育」である。このことは、1998年と2017年の幼稚園教育要領の改定に伴う養成過程に関わる背景が影響していると推察される。

個々の年代で特徴をみると、2017年～2020年のみに共起がみられる語句は、「領域」「子ども」「教員」である。2008年～2016年のみに共起がみられる語句は、「身体」「総合」「検討」であり、保育内容・表現の中でも「身体」表現や「総合」表現に関する「検討」に共起がみられると思われる。1998年～2007年のみの語句は、「方法」である。「養成」「授業」は、2008年～2016年、

2017年～2020年と共通である。「教育」「幼稚園」は、2017年～2020年と共通である。「視点」は、1978年～1997年と共通である。1978年～1997年についてみると、「幼児」などを始めとして多種にわたるが、個々の数は多くはない。

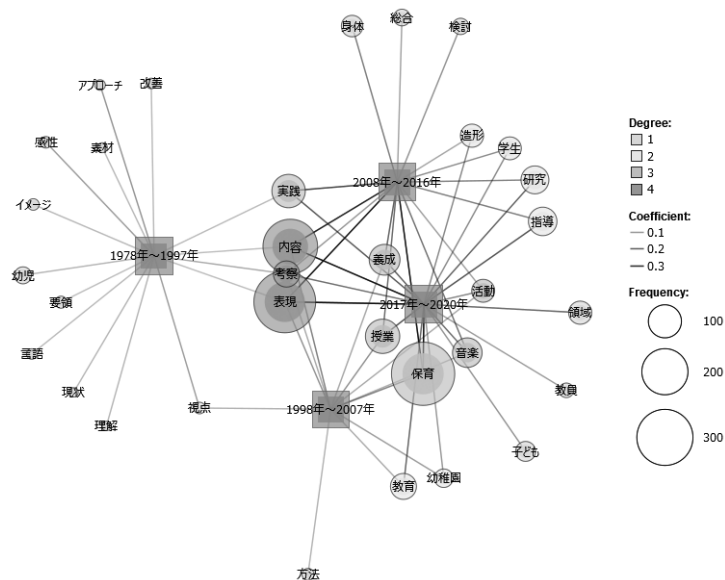


図3 「保育内容・表現」に関する年代別による抽出語との共起ネットワーク

3.2 「保育内容・表現」に関する特徴的な研究

3.2.1 「保育内容・表現」の研究に共起がみられる抽出語に関する特徴的な研究動向の例

「保育内容・表現」に関する論文の CiNii 掲載状況、「保育内容・表現」に関する研究の構造、論文種別による研究動向の差異、年代別にみた研究動向の推移を検討した。ここで、近年の文献数の増加を踏まえ、さらに年代間で共通に共起がみられる語句に注目し、「幼稚園教育要領」「音楽」「造形」「身体」など特徴的と思われる文献をあげて、「保育内容・表現」に関する研究の動向をみてみる。

なお、2016年までの研究動向に関しては、既報（畑野，2016）や畑野・道籬（2013）において報告しているため、本報では、特に、2017年に告示された幼稚園教育要領（文部科学省，2017a）、保育所保育指針（厚生労働省，2017）や幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府，2017）の改訂以降の論文を中心に取り上げることとする。

3.2.2 幼稚園教育要領等やシラバスに関する研究

まず、「幼稚園」「教育」「要領」「改訂」の共起関係がみられた語句から、幼稚園教育要領の改訂を背景とした、保育者養成課程における表現関係科目自体を検討した先行研究を概観してみる。2008年の幼稚園教育要領の改訂時には、保育者養成課程の表現関係科目のカリキュラムにおいて、「保育の内容・方法に関する科目」の保育内容「表現」に係る科目と「保育の表現技術」（身体表現、音楽表現、造形表現、言語表現等）に関する科目が実施されていた。その時期に、伏見（2008）は、保育者養成における表現関係科目の教育内容について、シラバスの

検討を行っている。

さらに、保育者養成における表現関係科目の教育内容について、シラバス研究の動向をみると、新實ら（2012）の保育者養成課程における表現関係科目の教育内容に関する研究があげられる。具体的には、幼稚園教員養成課程における「教職に関する科目」の「保育内容の指導法」の保育内容「表現」に係る科目と「教科に関する科目」、保育士養成課程における「保育の内容・方法に関する科目」の保育内容「表現」に係る科目と「保育の表現技術」（身体表現、音楽表現、造形表現、言語表現等）について、シラバスの検討を行っている。そして、造形表現に係る科目、言語表現に係る科目、音楽表現に係る科目に関して、各々シラバスの特徴をまとめている。しかし、身体表現に関しては記載がなく、ウェブで入手可能な範囲でのシラバス分析という条件の限界が推測される。

近年では、2017年の幼稚園教育要領の改定を背景に、再課程認定に関わる「領域に関する専門的事項」に関する科目の研究として、栗栖ら（2020）の「幼児の豊かな感性や表現する力を育む領域「表現」に関する保育内容の検討」があげられる。自校の「領域に関する専門的事項」に関する開設予定科目「幼児と表現（仮称）」の内容構成を構想するために、関連する専門分野の学問的知見を基盤とし、「幼児」や「幼児教育」の視座から領域「表現」における保育内容を検討している。具体的には、「3歳児の保育実践事例（土粘土遊び）」をもとに、素材との出会いを通じた感性の育ちに着目し、造形表現・美術教育学の専門的知見から考察している。また、「4歳児におけるボディパーカッションの保育実践事例を通して、幼児が様々な表現を楽しむ姿に着目し、音楽・身体表現の専門的知見から考察している。

3.2.3 「保育内容・表現」の領域ごとの研究概要

「保育内容・表現」を領域ごとにみると、それぞれ専門的な立場から実践の報告等が数多く試みられている。そして、頻度をみてみると、「音楽表現」に関する論文が最も多く、「造形表現」、「身体表現」、「言語表現」である。そこで、「音楽表現」、「造形表現」、「身体表現」の順に、個別に研究概要をみてみることにする。なお、「言語表現」に関しては、保育内容の5領域の中において、「保育内容・表現」と同様に、「保育内容・言葉」の領域が設定されている。また、「保育内容」の研究動向において、2017年以降では、「保育内容」の領域の中でも、「言葉」や「人間関係」に着目した研究が多くなされている（畑野，2019）。このような背景から、「保育内容」と「表現」をフリーワードとしたCiNiiでの文献抽出の際、「保育内容・表現」の領域における分類では、「言語表現」については割愛することとする。なお、「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラムにおいても、「幼児と表現」と同等に「幼児と言葉」があげられていることは、周知の通りである。

3.2.3.1 保育内容「音楽表現」

従来の保育者養成カリキュラムの研究の中でも、音楽に関する研究は、幾多かみられる。例えば、2018年に秋山・大内は、保育内容「表現」と音楽芸術との関連に着目した教員養成課程の学生指導に関して報告している。具体的には、保育内容「表現」に関わる活動を通じた学生の学びの試みとして行った、幼稚園におけるミニコンサートから得られた知見をまとめている。

廣瀬ら（2018）も、多様性・融合性および創造性に着目して、教員養成課程における「保育内容（音楽表現）」の授業実践を報告している。具体的には、「保育内容（音楽表現）」の授業のあり方について、授業実践、融合的な表現の学習に関する評価、共同授業評価コーディネートにより考察・検討している。その結果、「子どもの感覚や感情、思考に対して、保育者として気づき、返していく能力を身につけるためには、さまざまな音や、音の構造、素材への気付きとともに、さまざまな表現方法を体験して学ぶこと、創造的で融合的な表現のあり方について学ぶことが必要である」とまとめている。

また、「保育内容表現・音楽」の授業における学生のアセスメントシートやリフレクションシートの記述内容の分析に着目した報告もみられる。横山（2019）は、学生のアセスメントシートの記述を分析し、保育内容領域「表現」の授業における学生の気付きを促す「音の散歩道づくり」の教材性について考察している。その結果、「『音への気付き』『想像力』『イメージの伝え合い』『共感』のキーワードから、学生の気付きを促す『音の散歩道づくり』の教材性について考察を深めることができる」としている。

溝口（2018）は、「保育内容表現・音楽」の「うたによる音楽表現」の授業におけるリフレクションシートの記述内容を分析し、学生の学びや課題の特徴に関して、次のようにまとめている。「講義形式の授業では、興味関心をもったり初めて知った音楽表現の理論が学びとなる。模擬保育に入ると、発問や指示、導入の工夫等の実践的な技能が学びとなり、課題は、音楽表現を促す音楽的・言語的なパフォーマンスに向けられる。そこでの学びや課題は具体的で多岐にわたってくる。さらに、模擬保育を重ねることで、課題であった音楽的・言語的なパフォーマンスは、音楽表現の理論と関連づけられ実感を伴った学生固有の学びに変わる」。

また、「音楽表現」と学生の実習に関わる報告もみられる。諸井（2019）は、実習における指導計画案作成や模擬保育、園での表現活動、音楽表現に対する学生の意識を調査し、保育内容の指導法「音楽表現」に関して考察している。具体的には、「音楽活動を選択したいと意欲を持っているにもかかわらず、ピアノ技術等、音楽的な技術面での不安が原因で、音楽活動を含む指導計画案作成や実際に保育の場で音楽表現活動を提案することに消極的になっている」ことを明らかにしている。

一方、幼稚園教育要領等に直接的な記載はないものの、サウンド・エデュケーションに関する金子ら（2019）の研究動向に関する報告は、興味深い。具体的には、「学生の聴く力と音・音楽への感受性を育成することを目的に、サウンド・エデュケーションの実践報告55編について検討」している。その結果、研究対象では、幼児と中学生、高校生での実践は少なく、「サウンドマップ等の音の視覚化では、自らの中の音を発見させ創造力や表現力を高め、感性と環境との関わりを読み解く方法としての意義」を認めている。

また、メタ経験を観点として、保育内容表現の授業における音楽の感情表現的側面について検討した報告もみられる。島川（2020）は、保育士・幼稚園教諭を日ざす学生を対象として、音楽の感情表現的側面について学生のメタ経験について検証し、「音楽劇づくりの活動における感情、判断、取り組みの課題としての手続きが、バランスよく循環して為されている」ことを報告している。

さらに、音楽に関わる科目間連携については、川口ら（2019）が、自校の学生に、「一度身

につけた技能を複数の科目において繰り返す機会を与えることによってその技能を定着させ、学びを深めさせること」を試みている。そして、「情報共有により、それぞれの科目を担当する教員の「連携」に対する意識は高まりつつある」とし、領域に関わる科目との連携の重要性を報告している。

以上、「音楽」表現領域に関する特徴的な研究の概要をまとめたが、研究テーマは、保育教員養成課程における、「保育内容（音楽表現）」の授業実践を取り上げた研究、教材性の検討、サウンド・エデュケーションの実践報告、メタ経験、音楽に関わる科目間連携など、多義に渡っている。また、研究方法は、ケーススタディ的アプローチ、アセスメントシートやリフレクションシートの記述内容分析、受講者の質問紙調査の回答分析、文献レビューなどがみられる。

3.2.3.2 保育内容「造形表現」

造形表現分野の授業における教授内容については、宮城（2019）が、保育士試験の分析からの「標準的な知識と技能」を提案している。具体的には、保育士試験の問題を、テーマ（「発達過程」、「色彩理論」、「材料・用具」、「保育所保育指針」、「技法」、「イラスト問題」、「児童文化財」、「作品鑑賞」、「デザイン」、「造形要素」）に分類・カウントし、重要度を示している。そして、次のような提案を示している。「ア）制作経験をとおして知識や技能を形成できる。イ）材料・用具・技法について保有する知識を造形的な場面で活用できる。ウ）造形表現の発達過程を理解し、ア）・イ）に挙げる知識・技能を活用して、造形的な場面で必要な環境を構成できる。エ）保育所保育指針の内容を理解し、幼児造形活動のねらいや内容を設定できる」。

造形表現の「指導者」としての資質・能力を育成するため、井ノ口（2020）は、実践事例「へーんしん」における学生の造形活動や振り返りシートへのコメントなどを考察している。そして、「学生の主体性の発揮、環境や材料・用具の整備、一人ひとりの思いや行為に寄り添った支援、表現（造形活動）の記録と活用」の視点が重要と報告している。

また、造形教育カリキュラムについて、保育士を対象とした調査と小学校教員を対象とした調査との比較も試みられている（小橋ら，2019）。その結果、「保育士の造形表現活動における悩みは『子ども理解（発達）』『保育内容と理解』に関することが多い」ことや、「表現活動で育てたい力は“学びに向かう力”“思考力・判断力・表現力”」が多いことが報告されている。幼児期の造形活動で育てたい力は、「小学校では『はさみやのりの使い方』等（小橋ら，2019）つまり『3つの柱』（+他）に分類すると“知識・技能”の一部分に分類される回答」と報告され、保育士と小学校教員のギャップもみられる。

3.2.3.3 保育内容「身体表現」

「身体表現」に関しては、2017年以前に、筆者らは、保育者養成における保育内容「表現」とリトミックに関して、近年の研究動向と実践事例をあげて考察している（畑野・道籐，2013）。また、「身体表現」を中心とした実践研究を中心に、子どもの表現活動を対象とした研究動向（畑野・久山，2014）や、「新聞紙」を題材とした幼児の表現への可能性の検討から、「身体表現技術」の学習内容に関しても考察している（畑野・久山，2015）。また、総合的な表現の授業として、「身体表現」に「音楽表現」、「造形表現」、「言語表現」を取り入れた劇表現の作品

創作を想定し、「保育内容・表現」の授業を立案・実践している（畑野，2017）。

近年の「身体表現」に関してみると、松本ら（2020）が、保育学生を対象として、自校での初回授業時に「身体表現」に対して調査している。その結果、「体を動かすことや踊ることが好きな者が多いが、体で様々なことを表現することにはやや消極的な傾向があり、『身体表現』の授業にはリズム体操（型のある踊り）の習得を期待する者が多いこと」を明らかにしている。その上で、「保育内容『表現』のねらいと内容、内容の取扱いの理解を深めながら、『身体表現』への苦手意識を持つことがないよう、リズム体操等の『型のある踊り』や遊びを通した表現活動を取り掛かりに、様々な身体表現の経験を積むような授業計画」を提言している。

3.2.3.4 複合的・総合的な活動

「保育内容・表現」における領域の複合的・総合的な活動についてみると、松井・高橋（2018）は、保育者養成校における「保育内容領域・表現」の演習授業において、「身体表現」と「音楽表現」の融合を目指した実践を報告している。具体的には、「音楽表現」分野と「身体表現」分野の独立した授業に加え、横断的に修得のため初回と最終回（発表会）を合同授業で取り組んでいる。そして、授業方法と学生の自由記述による授業の感想、自己点検・自己評価を調査している。その結果、「両表現分野は密接に関係していること、他者の表現活動から学ぶことの重要性、表現方法の多様さやグループ内の活発な意見交換の必要性、他者のアイディアを認め共有することの大切さなど」の学生の記述を報告している。

松下ら（2018）は、身体表現・音楽表現・造形表現を考慮した総合的表現指導の観点から模擬保育効果的指導方法に関して、検討している。具体的には、身体表現の授業で学生が作成した「保育・言葉掛けプランニングシート」の中から、新教育要領で示されている「自然」「生活」「文化」をテーマにした3案を基に、各表現分野の視点から考察し、「総合的な表現を取り入れることで領域『表現』の目標やねらい、内容を網羅でき更には他領域の内容との関連性も生まれること」を明らかにしている。

保育者養成校における保育内容「表現」の授業内容に関わる研究は多数存在し、多様な授業方法が紹介されている。例えば、音楽表現活動を中心に「歌唱」「リズム」「身体表現」を取り入れた授業計画について、「造形表現」「音楽表現」「身体表現」を複合的に経験・習得することを目指した取り組みの研究、「音楽表現」と「身体表現」のそれぞれの担当教員が相互に授業を観察することによって、両分野の関りを捉えることを試みた研究等がある。

また、保育内容の領域を複数関わるような研究もみられる。笹谷（2018）は、日常のことば・音から即興表現へつなげる指導法を実践し、保育内容「言葉」と「表現（音楽）」の統合的な活動について検討している。具体的には、カール・オルフの音楽教育における理念を基に、日本語の特性（高低アクセント）に視点を置き、ことば（日本語）からリズム・旋律を作り出し即興表現を行っている。即興表現の材料となることばについて、サウンドスケープの下で子どもたち自らの耳と身体で音を聴かせ、日本語でそれらを表現し即興表現への材料とする体験に関して報告している。

さらに、「保育内容・表現」における領域の総合的な活動についてみると、キッズランド・キッズシアターについて、小山ら（2020）が、2年間の保育内容演習の授業における保育者養

成プログラムを構築し、取り組んだ実践や発表に関して報告している。授業発表後は、参観者からの依頼により、児童を招待してキッズシアターのショート版の発表や、地域の「保護者会連合会主催イベント」における部分的な発表を行い、「学生の学びが地域でも認められつつある」状況について、学生の主体的な学び形成の観点から記している。

三好ら（2018）は、「音楽表現」「造形表現」「身体表現」の科目の連携として、総合表現（創作オペレッタ）に関して報告している。具体的には、「創作オペレッタについての学生のアンケートをもとに、従来指導にあたってきた音楽担当者に加え、新カリキュラムから新たに創作オペレッタ指導に携わる造形表現・身体表現担当者が、その立場から、担当する各教科と創作オペレッタとの関連について考察を加え、教員及び保育者養成課程におけるオペレッタ」のあるべき姿について、検討している。

これまで、保育者養成課程においては、総合表現として、演劇、オペレッタやミュージカル等が数多く実施されている。そして、このような総合表現の授業に関する報告に関しても、「音楽」表現・「造形」表現・「身体」表現の各専門教員によるオムニバス形式や連携による授業改善の試み（伊藤ら，2014；滝沢ら，2016）や、学習効果に関する研究（佐々木・葛谷，2016）などがみられる。

3.2.3.5 情報機器

周知の通り、幼稚園教育要領等に「保育内容の指導法」として、情報機器及び教材の活用を含むことが設けられている。そして、「教職課程コアカリキュラム」では、「保育内容の指導法」の到達目標において、「情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる」ことが示されている（文部科学省，2017b）。したがって、「保育内容・表現」に関する研究において、このような情報機器に関わる内容についても、概観する必要があると思われる。

山本（2018）は、図画工作や保育内容（表現）の指導法におけるアクティブラーニングの一手法として、ICT 機器（教材提示装置）を活用した紙芝居の発表について、アンケート結果から考察している。その結果、「おおむねポジティブな印象をもった回答者が多いこと」から、その有効性を報告している。さらに、「パワーポイントやデジタルムービーの作成、あるいはクリッカーなどを教材提示導入した授業プログラム」などの計画に言及している。

ICT、情報機器を活用した表現活動に関して、山田（2019）は、領域「表現」のねらいに沿い、子どもや学生を主体とした活動になり得るかどうかが実践している。その結果、逆再生ムービーという表現活動は、「情報機器がアウトプットを担うため、苦手意識が払拭されること。内発的に動機付き、意欲の高い制作～鑑賞が行われること。長期にわたり継続した表現活動の選択肢となること。絵や工作だけではない表現の幅を広げる契機となること」などの検証結果を報告している。今後は、「教職課程コアカリキュラム」が、保育者養成課程における教職課程編成の指針となっているため、情報機器に関わる実証的な検討が望まれる。

4. 総括

本報では、CiNii を用いて論文タイトルをスクリーニングし、掲載状況、論文種別による研究動向の差異や年代別にみた研究動向の推移に関する検討を行い、「保育内容・表現」の教育

に関する研究動向を明らかにした。その結果、特に年代ごとの推移では、幼稚園教育要領等の改訂が反映されていると示唆された。検索では、「保育内容・表現」がキーワードで登録されているが、タイトルそのものに含んでいるとは限らない。しかし、その中でタイトルを検索するという仕組みの限界はあるものの、全体的な研究動向を明らかにすることができた。

また、2017年告示の幼稚園教育要領等の改訂や、保育・幼児教育関連の省令の動向を踏まえ、改訂以降の文献を中心に特徴的と思われる論文をあげて、「保育内容・表現」に関する近年の研究動向を概括した。その結果、既報（畑野，2016）と同様に、「音楽表現」、「造形表現」、「身体表現」の各専門領域から単独または総合的な表現へと展開されている実践報告が数多く認められた。実践の学習効果の評価については、受講者の自由記述の感想文例を取り上げる試みが多かった。2010年以降は、「総合表現」に焦点化される傾向もみられ、演劇的プログラム等の報告が幾多かみられる。さらに、2017年以降には、「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令案について」（文部科学省，2016）の中で、「情報機器及び教材の活用法」が示されているため、情報機器に関わる実践の検討に関する論文も散見された。

2017年に策定された「教職課程コアカリキュラム」（文部科学省，2017b）や「領域に関する専門的事項のモデルカリキュラム」（文部科学省，2017c）は、保育者養成課程において、教職課程編成の指針となる。今後、新設された「領域に関する専門的事項」に関する科目の「幼児と表現」についても、実証的な研究の蓄積が望まれる。

文献

- 秋山麻実・大内邦靖（2018）保育内容「表現」と音楽芸術との関連に着目した教員養成課程学生指導に関する研究．山梨大学教育学部紀要，27：21-31.
- 伏見強（2008）保育者養成校における音楽系科目のシラバス充実のための一考察—日本保育学会第61回大会を俯瞰して．京都文教短期大学研究紀要，47：11-21.
- 畑野裕子（2016）保育者養成課程における「保育内容・表現」に関する研究動向．神戸親和女子大学大学院研究紀要，12：11-24.
- 畑野裕子（2017）教員養成課程における総合的な学習の学習指導過程と指導法に関する実践的研究：アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた「保育内容の研究・表現」を中心に（開学50周年記念号）．神戸親和女子大学研究論叢，50：61-71.
- 畑野裕子（2019）「保育内容」の研究動向に関する一考察：CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて．神戸親和女子大学児童教育学研究，38：231-245.
- 畑野裕子・久山素子（2014）子どもの表現活動を対象とした研究動向に関する一考察—身体表現を中心とした実践研究を中心に—．神戸親和女子大学教育研究センター紀要，10：35-45.
- 畑野裕子・久山素子（2015）「身体表現技術」の学習内容に関する一考察—「新聞紙」を題材とした幼児の表現への可能性の検討—．児童教育学研究，34：33-48.
- 畑野裕子・道旗維子（2013）保育者養成における保育内容「表現」とリトミックに関する一考察—近年の研究動向と実践事例—．神戸親和女子大学教育研究センター紀要，9：57-65.
- 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して，ナカニシヤ出版.
- 樋口耕一（2019）KHcoder3 (<http://khc.sourceforge.net/>) [最終アクセス2019年11月19日].
- 廣瀬史佳・小島千か・秋山麻実（2018）教員養成課程における「保育内容（音楽表現）」の授業実践研究：多様性・融合性および創造性に着目して．山梨大学教育学部紀要，27：283-291.
- 井ノ口和子（2020）保育内容（表現Ⅱ）における授業実践の考察—指導者としての資質・能力の育成を目指して—．共栄大学研究論集，18：209-222.
- 伊藤智里・秋政邦江・青井則子・尾崎公彦・入江 慶太（2014）総合表現（オペレッタ）における授業開発Ⅱ：領域「言葉」「表現（身体表現・造形表現・音楽）」に関する科目内容とオペレッタ制作との関連．川崎医療短期大学紀要，34：29-37.

- 金子珠世・池田孝博・鷲野彰子（2019）サウンド・エデュケーションに関する研究の動向と課題，福岡県立大学人間社会学部紀要，27(2)：1-16.
- 川口潤子・杉本明・土橋久美子・三ッ本晴彦（2019）音楽に関わる科目間連携の試み その1. 保育・教育の実践と研究：白百合女子大学初等教育学科紀要，4：17-25.
- 小橋暁子・佐藤真帆・槇英子（2019）幼小をつなぐ造形教育カリキュラムの研究(2) 実態調査の結果と保小の比較，千葉大学教育学部研究紀要，67：395-400.
- 国立情報学研究所（NII）CiNii <https://ci.nii.ac.jp/> [最終アクセス2020年8月21日].
- 厚生労働省（2008）保育所保育指針〈平成20年告示〉フレーベル館.
- 厚生労働省（2010）指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について一部改正（雇児発第0227005号）.
- 厚生労働省（2017）保育所保育指針〈平成29年告示〉フレーベル館.
- 小山優子・渡邊寛智・梶谷朱美・小林美沙子（2020）保育内容演習ⅠⅡを通した学生の主体的な学びの形成に資する保育者養成プログラムの構築(4)：2019年度のキッズシアターの取り組み，人間と文化，3：75-84.
- 栗栖由美子・藤井康子・永田誠（2020）幼児の豊かな感性や表現する力を育む領域「表現」に関する保育内容の検討，大分大学教育学部研究紀要，41-2：159-180.
- 松井典子・高橋仁美（2018）身体表現と音楽表現の融合を目指して：保育者養成校における保育内容領域・表現の演習授業を通して，滋賀短期大学研究紀要，43：131-142.
- 松本希・秋山真理子・吉田升・飯田智行（2020）身体表現に対する保育学生の意識調査：保育内容「表現(身体)」の受講前調査，就実教育実践研究，13：59-67.
- 松下茉莉香・中村礼香・小松恵理子（2018）子どもの表現活動の効果的指導方法に関する研究：身体表現・音楽表現・造形表現を考慮した総合的表現指導の観点から，鹿児島女子短期大学紀要，54：81-90.
- 宮城正作（2019）造形表現分野の授業における教授内容の提案—保育士試験の分析をととして—，こども学研究，1：39-53.
- 三好優美子・渡邊洋・長谷川千里・柳田憲一（2018）総合表現（創作オペレッタ）における表現科目の連携：「音楽」「造形表現」「身体表現」の観点から，東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要，53：47-62.
- 溝口希久生（2018）リフレクションシートの記述内容からみた学生の学びや課題の特徴に関する考察：「保育内容の音楽表現」の授業を通して，東亜大学紀要，26：1-12.
- 文部科学省（2008）幼稚園教育要領（平成20年告示），フレーベル館.
- 文部科学省（2016）教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令案について（概要）※暫定版.
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/20/1387656_04.pdf) [最終アクセス2020年9月9日].
- 文部科学省（2017a）幼稚園教育要領〈平成29年告示〉フレーベル館.
- 文部科学省（2017b）教職課程コアカリキュラム
(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf) p.8 [最終アクセス2020年9月9日].
- 文部科学省（2017c）領域に関する専門的事項のモデルカリキュラム.
(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/19/1385791_7.pdf) [最終アクセス2020年9月9日].
- 諸井サチヨ（2019）保育内容の指導法「音楽表現」に関する一考察：学生の実習における子どもの表現活動を扱った指導計画に関する意識調査を通して，淑徳大学短期大学部研究紀要，59：97-108.
- 内閣府（2017）幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈平成29年告示〉フレーベル館.
- 佐々木友里・葛谷潔昭（2016）保育士養成におけるオペレッタ創作の効果～社会人として求められる能力の獲得の可能性について～，豊岡短期大学論集，13：187-194.
- 笹谷朋世（2018）保育内容「言葉」と「表現（音楽）」の統合的な活動の指導法に関する研究：日常のことは・音から即興表現へつなげる指導法，日本福祉大学子ども発達学論集，10：79-87.
- 島川香織（2020）音楽の感情表現的側面を通した保育内容表現授業におけるメタ経験について，教育総合研究叢書，13：81-93.
- 新實広記・藤重育子・西濱由有・矢藤誠慈郎（2012）保育者養成課程における表現関係科目の教育内容に関する研究(1)，東邦学誌巻，41：141-162.
- 滝沢はだか・山田悠莉・横田則子（2016）造形・音楽・身体表現を連携させた保育内容「表現」の授業改善①—授業設計を中心に—，日本保育学会第69回大会発表要旨集，p.402.
- 山田修平（2019）領域「表現」におけるICT、情報機器活用の考察：情報機器を用いた表現活動，淑徳大学短期大学部研究紀要，59：161-170.
- 山本斉（2018）図画工作や保育内容(表現)の指導法におけるアクティブラーニングの一手法としてのICT機

器を活用した製作品の発表についての考察-教材提示装置を使用した紙芝居の発表についてのアンケート結果から. 松山東雲短期大学研究論集, 49:14-24.

横山真理 (2019) 保育内容領域「表現」の授業における学生の気付きを促す「音の散歩道づくり」の教材性. 東海学院大学研究年報, 4:53-65.